

本名純・川村晃一 編

## 『二〇〇九年インドネシアの選挙』

— ユドヨノ再選の背景と第二期政権の展望 —

情勢分析レポート No. 14



指して企画されたものである。

## ●現代インドネシア政治分析の系譜

アジア経済研究所は、激動の連続だった一九

五〇年代半ば以降のインドネシアの政治経済を同時代的に分析する作業が続けてきた。それらは、スハルト体制の崩壊を見据えて編まれた『展開急なインドネシア大統領後継問題』（一九九七年）を皮切りに、『スハルト体制の終焉とインドネシアの新時代』（一九九八年）『インドネシア・ワヒド新政権の誕生と課題』（一九九九年）『インドネシア総選挙と新政権の始動—メガワティからユドヨノへ』（二〇〇五年）といった成果として刊行された。また、この間にも、二〇〇〇年四月・二月、二〇〇五年二月、二〇〇八年七月と四回にわたり本誌でインドネシア特集が組まれてきた。

しかし、政治が安定したことで、インドネシアの選挙に対する国際的な関心は低下した。二〇〇九年には総選挙と大統領選挙が実施されたが、現職のスシロ・バンバン・ユドヨノ大統領が圧倒的な支持を得て再選されたこともあり、盛り上がり欠けるものとなった。本書は、そのような関心の低下したインドネシアの選挙に光をあて、もう一度読者の興味を呼び戻すことを目

外から総勢八人の中堅・若手研究者が集まり、この作業に取り組んだ。その結果、国際的にも類書のないほど多角的にインドネシアの選挙を洞察することが可能になった。

## ●本書の問題意識と構成

二〇〇九年の選挙では、いまや日常政治の二コマになった選挙をインドネシア自らがしっかりと運営できるのか、そして選挙が有権者の意思を政治の場に反映させるための機能をうまく果たせるのかが問われた。その意味で、この選挙は、民主主義の定着の岐路に立つインドネシアにとっては重要な選挙であった。

私たちは、この民主化後三度目の総選挙と二度目の大統領選挙で、政治の何が変わり、何が変わらなかったのか、そして選挙結果は今後の政治をどう方向付けるのかという問いを念頭に置きながら分析を進めた。

本書の最初の三つの章は選挙プロセスに焦点を当てている。国会議員選挙を分析した第一章は、与党民主主義者が勝利した原因を探り、有権者の投票行動に変化がみられることを明らかにした。大統領選挙を分析した第二章では、候補者擁立をめぐる権力闘争とユドヨノの選挙戦略が論じられており、ユドヨノ陣営の積極的な票動員の過程が明らかにされている。選挙運営の問題を扱った第三章は、民主化後最も選挙実施過程が混乱した二〇〇九年の選挙のなかで持ち上がった問題を取り上げ、その原因を探っている。

つづく三つの章は、特定のアクターに注目した分析である。第四章の分析は、メディア選挙の浸透にともなって勃興してきた選挙コンサルタントに関する国際的にも先駆的な研究である。第五章は、国会議員の社会的背景を過去二度の選挙との比較のなかで分析し、政治家と政党の変化を論じている。第六章は、今回得票率を大きく減らしたイスラーム系政党の退潮の原因を探り、岐路に立つイスラーム系政党の現状が明らかにされている。

最後の二つの章は、選挙後に発足した政権の性格を議論している。第七章は、ユドヨノ第二期政権発足のプロセスと内閣の構成を分析したうえで、今後の内政上の課題を論じた。第八章は、経済政策の決定過程を分析したうえで、政権が取り組むべき経済政策上の課題を論じている。

巻末には、選挙結果や選挙参加政党の一覧、内閣名簿など、選挙に関係した資料を掲載した。

本書を一読してもらえば、地味に見えるインドネシアの選挙もいまだ大きなダイナミズムを維持している一方で、民主主義の定着に向けてはさまざまな問題を抱えていることを理解してもらえるはずである。一過性の関心の多寡に惑わされずに、地道な研究を続けることの大切さを私たち自身も本書の執筆を通じて再認識したところである。

（かわむら こういち／アジア経済研究所東南アジア研究グループ）